
機動戦士ガンダム00 見つめる者

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムOO 見つめる者

【Nコード】

N1505Z

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

軌道エレベーターによる太陽光エネルギーの恩恵を受ける世界と、その覇権を争う世界に、私設武装組織ソレスタルビーイングがガンダムにより介入する。

争いの絶えない世界への劇薬として力を振るうガンダム。
その犠牲となる者たちを、後方から見つめ続ける1人のスナイパーがいた。

これは、そのスナイパーの見た戦いと、その想いを綴る1ページで
ある。

青年は、軍人である。

ただの軍人ではない。MS^{モビルスーツ}と呼ばれる、機動兵器のパイロットである。

しかしこの青年、戦うことがあまり好きではなかった。

では何故国軍に入隊したかといえば、軍将校である父の影響が大きい。

父に言われるまま士官学校に入学し、そのままパイロットの道を志した。

青年は優秀だった。

楽がしたい、という本人の意思に反し、出撃する度に戦果を上げる彼の位は上がり、比例するように仕事の量は増えていく。

勘違いしてはいけないのは、彼は持て囃されるのは嫌ではない。ただ、仕事が増えることだけが嫌なだけだ。

だから、彼の所属するユニオン所属の主力MS、ユニオンフラッグを自分専用の鮮やかな空色のカラーリングに変えた機体（前線に出ることが本意ではない彼に比べ、狙撃戦用にカスタマイズされている

る）が配備された時には素直に喜んだし、これで死に晒される前線におさらば出来るであろうと内心ほっとしたものだ。

しかし。

「これは……………ないだろ……………」

コックピット内でスコープを覗きながら、青年はそう毒づいた。

スコープの向こう側、青年が狙撃ポイントに選んだ岩山より数百メートルと離れた場所では現在、死闘が繰り広げられていた。

否
蹂躪と呼んでも構わない。

桜色のビームが幾度も視界の中を飛び交い、先程まで基地で馬鹿みたいに騒いでいた男達が乗っているはずの機体を鉄屑に変えていく。

まさしく、圧倒的。

生半可な腕では埋めようもないその差は、戦局という形で彼等の眼前に突き付けられていた。

スコープの中のターゲットサイトに、長銃を携えた深緑の機体に向けて、専用に開発されたスナイパーライフルを放った。

青く発光した弾丸は狙いを寸分も違えることなく、標的の腕に直撃したが。

「……………くそっ」

毒づいた青年の言葉どおり、煙の中から標的は傷1つない姿で踊り出た。

「ガンダム……………」

MS、名をガンダム。

ある時、突如世界に宣戦を布告した、正体不明のMS。

従来の機体を大きく上回る機動性に、洗練され、実装されたビーム兵器。

どういった理屈か、周囲の通信を妨害する機能を持ち、装甲はMS用に開発された武装の弾丸をも跳ね返す。

全くもって、規格外。

ガンダムという機体は瞬く間に世界を席卷し、ついに擬似的ではあるが世界の意味を纏めるに至った。

ガンダムを倒すという、総意に。

そんなガンダムであるから、所詮既存のフラッグ用リニアライフルを狙撃戦用の超射程、高威力に改造したに過ぎない彼のスナイパーライフルで、軽くのけ反らせることは出来ようと、そのボディに傷1つ付けることは出来ず、ましてや撃破に追い込むなどとおこがましいにも程があつたが、仕方がない。

？それ程の？差がついてしまっているのだ、あの機体達とは。

それに今回、青年はあくまでも牽制の担当。

ガンダムの『鹵獲』は、前線で艶のある真っ黒なボディの、オーバーフラッグと呼ばれる機体で編成されたMS隊が引き受けることになっていた。

オーバーフラッグとは、一部の研究者達によって、ユニオンフラッグの性能を限界ぎりぎりまで引き上げた、現状で最高のスペックを持つフラッグ。

ガンダム1機に対し、オーバーフラッグスは複数機での編隊。

先程勝手な行動をした機体が早々に撃墜されていたが、さすがはユニオンきつてのフラッグパイロット、グラハムIIエーカー上級大尉が率いる部隊だ。統率のとれた動きでガンダムを追い詰めるが、オーバーフラッグのようなチューンを受けていない機体は、ガンダムの放った流れ弾に当たって爆散していった。

その殆どが、オーバーフラッグスの支援に駆り出されていた青年の部隊だった。

やり切れない思いはある。仲間達をあんな姿にしたガンダムに、遺恨がないというなら嘘になる。

しかし、彼は軍人である。職務に忠実であるべき一将校である。

ここで怒りに任せて、リニアサーベルを手に突撃するほどの蛮勇も持ち合わせていなかった彼が操るフラッグは、スナイパーライフルを構えたまま、ゆっくりと浮上した。

ガンダムが自分の機体を捉えているかどうかは解らなかったが、敵機の挙動に十分に気を配った上で、トリガーを引く。

幾つかは避けられるか盾で防がれたが、敵機の機動が読めた上で放った数発は胴や四肢に直撃し、ガンダムの動きを一瞬の間止める。

ガンダム程の驚異的性能を持ち得ないこちらにとって、それこそが好機だった。そしてその隙を逃す程、グラハムⅡエーカーは愚かではなかった。

翡翠色の粒子をこんこんと吐き出し続けるたった1機へ、漆黒の影が次々に襲い掛かる。

勝った。

そう思った一瞬だった。

彼等にとつての勝利とは、ガンダムを撃破することではない。

鹵獲すること。その構造を調べ上げ、自らの武器とすること。

それこそが勝利と知っているからこそ、その場の誰もが気付いていなかった。

上空から戦況をじつと見下ろしていた、新たな漆黒と紅の影に。

「……………な、につ!？」

青年が、直前に気付いた。

もはや、本能的な直感に従って、青年は機体を下がらせた。一瞬遅れて、空色のフラッグがほんの1秒前に滞空していた空間を、血の

ように紅いビームが貫いていった。

次いで仲間らに注意を呼び掛けようとしたが、遅かった。

青年が回線を開く前に、紅のビームに貫かれてオーバーフラッグ数機が消し飛んだ。

堪らずグラハムが撤退命令を出し、ガンダムに群がっていた機体は蜘蛛の子を散らすように撤退していく。

それを安堵と苦渋の入り混じった複雑な表情をしながら、青年もまた同じ方向に機体を飛ばした。

「……………ったく。やってられねーっつーの」

出撃から数時間後。

基地へ戻り、報告と書類の整理を終えた青年は、基地から少し離れ

た町の中にあるバーにいた。

「おいクレス、まだ飲むのかよ……大丈夫なのか？」

と、客の使った皿を拭いていたバーのマスターが、酔いに頬を紅潮させた青年　　マスターは、彼をクレスと読んだ
を苦笑しながら宥めるが、当のクレスはそんなこと知ったことかと言わんばかりに、グラスの中のウィスキーを飲み干した。

「おかわりっ！」

「おいおい、もうそれくらいにしといたらどうだ。明日どうなっても知らないぜ？」

明日は生憎と仕事もある。

ならば、こんなところで酔い潰れて二日酔いになるなど愚の骨頂。そんなことくらい、クレスも理解していた。

だが　　。

「悪いな。今は酔って、何もかも忘れたい気分なんだ」

「またあれか？　例の……ガンダムって奴」

そう、マスターが言った矢先に、バーの天井近くに備え付けられたテレビから、件の戦闘のニュースが聞こえてくる。

「……………また、派手にやられたようだな」

「うつさい。ほら、早くも一杯」

「へえへえ」

仕方なくウィスキーを注いだグラスをクレスは強引にかっさり、テレビを避けるようにそれとは反対方向を向いて再びグラスを傾ける。

ぶはあ、と息を吐く音と共に、クレスはそれまでの勢いはどこへやらといった様子でぽつりと言った。

「……………あれでも、気の許せる仲間だったんだよ」

「……………だが、仕方ないだろう？　これは戦争なんだ」

「ああ、そうさ、戦争さ。この前の戦闘だってそうだ。俺は後衛、奴らは前衛。解ってるさ……………。でもな、だからってあいつらだけこんなにあっさり死んじまって、臆病な俺だけこんなふうのうのうと生き残っているってのは……………ははっ、どういうわけなんだろうな、マスター？」

「どうもこうもあるか。戦争ってのはな、いつだって臆病な奴が生き残るんだよ。勇敢な人間ってのを人々は讃えるが、俺に言わせれば戦争での勇氣なんてものはただの蛮勇だ。怖いって感情を捨てちゃった人間ってのは……………早死にする」

言いながら、マスターは食器を拭くのをやめて、持っていたグラスをカウンターに置いた。

コトリ、という音がジャズの流れる店内に、妙によく響いて聞こえ

る。

マスターの視線は、カウンターに置かれた写真立ての写真へ向けられていた。

「お前は生き残ったんだ。よく言うだろう？ 命あつてのなんとかってな。うだうだ言ってる暇あつたら腕磨いて、機体を強化して……ガンダムが1つや2つ倒せるくらい強くなってみせる」

「ははっ、無茶言ってくれるなよ。でも……ま、そうだな。騒いだってガンダムが弱くなってくれるわけでも、あいつらが帰ってくるわけでもないんだもんな」

そう言つて、どこか吹っ切れた様子でクレスは立ち上がった。

ごそごそとズボンのポケットを探り、硬貨をカウンターへ無造作に広げる。

「釣りはいらん。いい酔い覚ましになった」

「そりやどうも。精々明日の公務に差し支えないようにしろよ、酔っぱらい」

そう、去っていくクレスの背に呼びかけるマスターへ、クレスは戸口へ向かい そこで、唐突に振り返つて言った。

「次来る時は……祝い酒でも一緒に飲もうや、マスター？」

「おう。そんな時は、いくらでも付き合つてやるぜ」

マスターの言葉に満足げに微笑むと、クレスの姿は今度こそ戸の向こうへ消える。

酔っぱらいがいなくなった店内。

その中でマスターはやれやれと溜め息を1つつくと、次の皿を手に取りのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505z/>

機動戦士ガンダム00 見つめる者

2011年12月5日19時00分発行